

朝倉古墳発掘調査概要報告書

2009年3月

高知大学人文学部考古学研究室

朝倉古墳発掘調査概要報告書

2009年3月

高知大学人文学部考古学研究室

例 言

- 1 本報告は高知市朝倉字宮の奥小字三月田に所在する朝倉古墳の発掘調査概要報告である。
- 2 調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となって実施した。調査は、清家章（人文学部教授）が担当した。
- 3 本調査の実施については日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究」の一部を使用している。また、本書の発行については、人文学部人間文化学科の配慮を得た。
- 4 調査期間は2008年8月2日から9月1日である。
- 5 写真の撮影は清家と岡本治代が主として担当した。
- 6 挿図のうち、図1～3の方位は真北を示し、その他の方位は磁北である。標高は海拔を示す。
- 7 図3は国土地理院発行の5万分の1地形図を利用した。
- 8 土器実測図のうち、須恵器は断面を黒塗り、土師器・瓦器・陶器は白ヌキとし、磁器はアミを入れて区別している。
- 9 調査には高知大学人文学部考古学ゼミ生ならびに人文学部1～2年生が参加した（学年は調査当時）。参加者は以下の通りである。馬場省吾・渡邊可奈子（以上、大学院生）、矢部俊一・岡本治代・高山沙織・玉井沙良・永元智宣・新名悠由・渡邊峻・岡山克也・鷲圭太・妹尾佳奈・辰見知香・山崎香菜恵・渡邊早苗・有岡真知・高橋利奈・瀧宮智春・村上裕紀・森田沙織・川添あゆみ・猪木謙介・永島順太・藤井雄大（以上、高知大学学生）。なお、整理作業には上記学生の多くがこれに参加したが、馬場・渡邊可・矢部・岡山・鷲・妹尾・辰見・山崎・渡邊早がその中心を担った。
- 10 調査の実施にあたり、廣田住久・福永伸哉・出原恵三・浜田恵子・松田直則・森田尚宏・安岡保・青木ハウス・朝倉神社・朝倉宮の前奥座内町内会・株式会社トヨタ部品四国共販高知支店・高知県教育委員会・高知市教育委員会（個人・団体の順。五十音順。）より、多大なご協力をいただいた。
- 11 本書の執筆は、清家・桥家豊（卒業生）・馬場・渡邊可・矢部・鷲・藤井が担当した。分担は文末に示した。
- 12 本書の編集は、清家の指導の下、渡邊可が担当した。

目 次

第Ⅰ章 調査経過	1
1 周辺の遺跡	1
2 調査の経緯と経過	4
第Ⅱ章 調査成果	7
1 墳丘の調査成果	7
2 石室調査区の成果	9
第Ⅲ章 山土遺物	15
1 出土遺物の種類	15
2 古墳時代の土器	15
3 中近世の土器	17
第Ⅳ章 まとめ	19

図版目次

図版

- 1 1 古墳の立地
- 2 石室正面
- 2 1 墳丘第1トレンチ（西から）
- 2 墳丘第1トレンチ（南から）
- 3 1 石室玄門（渓道から）
- 2 石室玄門（玄室から）
- 4 1 石室奥壁
- 2 石室調査区全景
- 5 1 9A・10A区敷石（北から）
- 2 7B・8B区床面（東から）
- 3 8A区床面と盜掘抗断ち割り（北から）
- 6 1 古墳時代の土器1
- 2 古墳時代の土器1裏面
- 7 1 古墳時代の土器2
- 2 中近世の土器

挿図目次

図1	朝倉古墳の位置（赤島賛佳製図）	1
図2	朝倉古墳の立地（植家製図）	2
図3	周辺の主な古墳（辰見製図）	3
図4	石室掘削前状況	4
図5	遺物出土状況	4
図6	発掘調査風景	5
図7	調査の1コマ	5
図8	調査区配図（山崎製図）	7
図9	墳丘第1トレンチ平面図・土層断面図（嶋製図）	8
図10	石室調査区・区割り設定図（渡邊可製図）	9
図11	石室調査区縦断・横断土層図（高山・妹尾・渡邊可製図）	10
図12	石室調査区実測図（馬場製図）	11～12
図13	上部の敷石に挟まれた土師器（9A区）	13
図14	床面敷石検出状況（8B区）	13
図15	8A区断ち割り南側土層図（辰見製図）	13
図16	古墳時代の土器（渡邊可製図）	15
図17	中近世の土器（渡邊可製図）	17

第Ⅰ章 調査経過

1 周辺の遺跡

朝倉古墳は、高知市朝倉字宮の奥に所在する。高知市は高知県の中部に位置し、なかでも朝倉は高知市の西部にあたり、いわゆる高知平野全体においても西端に位置する。

朝倉古墳は、高知市西部の北に広がる山々の一つ、赤鬼山の中腹から南向きに派生する尾根の東側斜面上方にある。赤鬼山の南側山腹と古墳のある尾根とでV字状の谷が形成され、その谷奥からやや南に古墳は位置する。やや高い場所に立地しているにも関わらず、さして眺望は開けているわけではない。それでも東は鏡川流域の平野部を見渡すことができる。南には中世の朝倉城が築かれた城山が間近に迫っており、城山と古墳の存する赤鬼山の間にある畦内坂を抜ければ伊野・枝川方面へと抜け仁淀川に至る。つまり、当古墳は、高知平野の中心部から吾川方面及び高知県西部に向かう上で交通上の要所を見下ろす場所にある。(図2・図3)。

土佐には、いわゆる古墳時代前半期に属する古墳はきわめて少ない。また、確実な前方後円墳が確認されていないなど、西日本ではきわめて特異な地域である。前半期に遡る可能性のある古墳としては、幡多地域にある宿毛市高岡古墳群と宿毛市曾我山古墳、高知平野では南国市长畠2号墳・南国市狭間古墳などが挙げられるにすぎない。したがって、土佐では横穴式石室を内包する後期・終末期古墳が主として展開している。

東西に広い高知平野において、後期古墳が数多く展開するのは南国市を中心とする東部地域である。高知平野において最も古い横穴式石室を有する古墳も南国市にあり、長畠4号墳と呼ばれる。竪穴系横口式石室であるが、九州等で見られるようなものではなく特異な形態を有する。出土した須恵器もTK10型式併行期に相当することから長畠4号墳の竪穴系横口式石室は当地域における横穴系埋葬施設の初現であると考えられる。これに続くと目されるのが南国市蒲原山東1号墳や高知市高間原1号墳などである。蒲原山東1号墳は長畠古墳群にも位置的に近く、長畠古墳群の系譜をひくものと考えられる。一方、高間原古墳群は、現在の高知市と南国

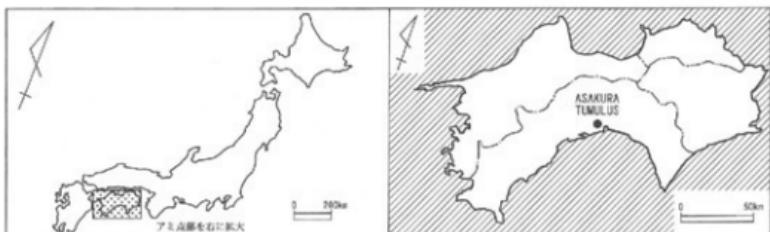


図1 朝倉古墳の位置

2 周辺の遺跡

市の境界付近という位置にあることや、石室が小型であること、また、玄門立柱が羨道の内側にせり出すという形態的な特徴などから、蒲原山東1号墳などとは別の系譜上にあると思われる。

この後、TK43型式併行期からTK209型式併行期にかけて高知平野の北東に面した丘陵上に盛んに横穴式石室墳が築造される。南国市小奈路古墳や、高知三大石室の一つである南国市小蓮古墳、高知県最大規模の古墳群である南国市舟岩古墳群などである。同時に高知市葵泉寺古墳群やいの町枝川古墳群などのようにこれまで古墳が築造されていなかった高知平野西半まで横穴式石室が見られるようになる。

7世紀代にも舟岩古墳群や高間原古墳群の築造は続いている。朝倉古墳は7世紀に築造された大型石室を有する古墳である。これまで見てきたように、高知平野の古墳は多くがその北東部の丘陵上に集中し、現在の区分でいうならば南国市から香美市にかけて、古墳築造の中心があったということができる。そのような中で朝倉古墳は中心から西に離れた地区にある点で特徴的である。石室も他の古墳に比べ、玄門立柱石が頗著に内側にせり出すなど大きな違いをみせる。このような違いを持つ古墳が、どのような背景を持ってこの地に築かれるのか、また南国市から香美市にある古墳との関係も問われるところである。

(橋家)

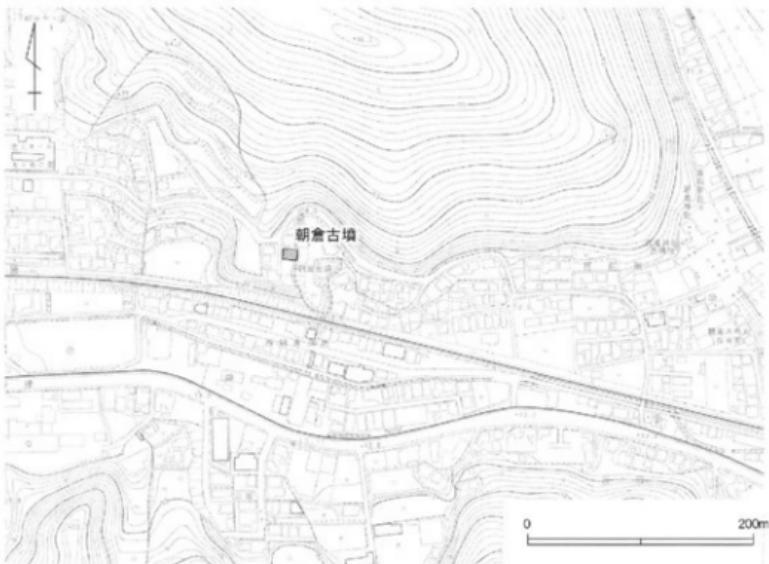


図2 朝倉古墳の立地

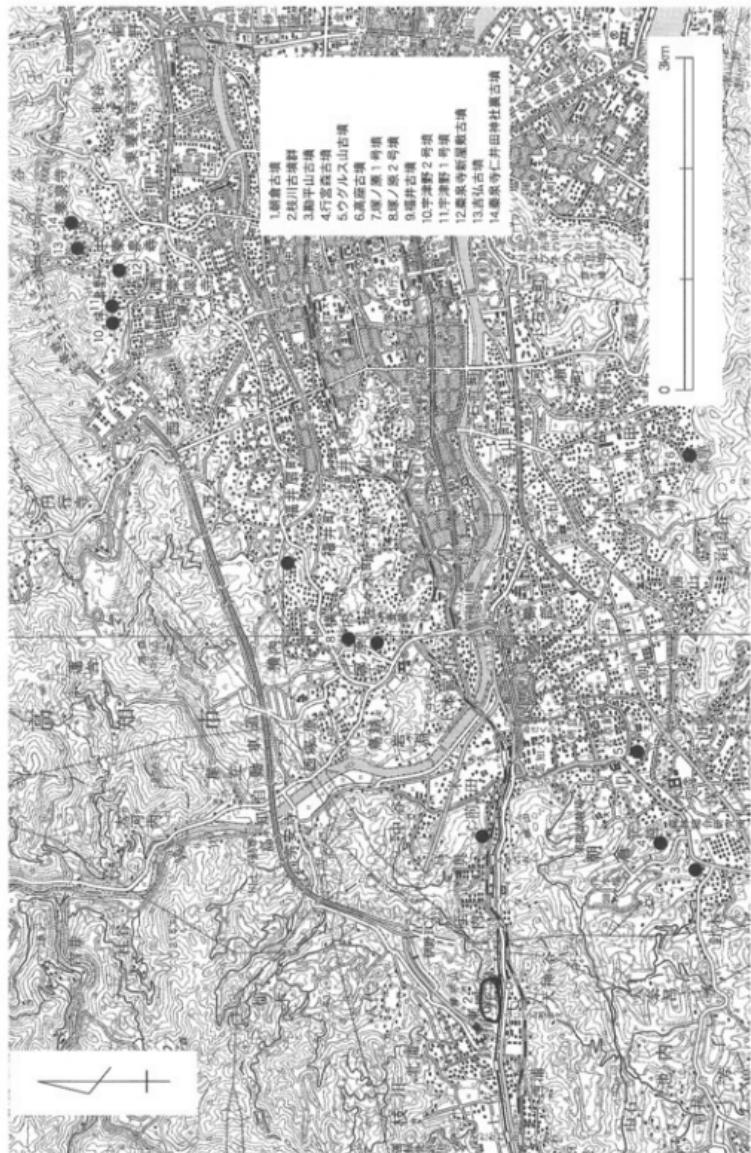


図3 周辺の主な古墳

2 調査の経緯と経過

過去の調査 朝倉古墳はこれまでにも数度にわたる調査が行われている。朝倉古墳に関する文献からそれらの調査を順に並べてみると以下のようになる。

明治初年 石室の調査。甲冑・馬具・鉄鎌・須恵器が出土（安岡1953）。

1930年 青年団による調査。標注・説明板の設置。墳丘測量（高知新聞1930年）。

1935年 安岡源一による石室調査。鉄鎌1本と須恵器破片多数出土（安岡1953）。

2004年 高知大学人文学部考古学研究室による測量調査（高知大学編2005）。

墳丘の調査は、1930年11月4日付けの高知新聞によれば、青年団によって測量が行われたようであるが、その図面は現在に伝わっていない。1930年代までは墳丘盛土も遺存していたようであるが、その後の開墾で盛土は流失し、天井石が露出するようになったようである。その後、1970年以降、石室周辺に住宅開発の波が及んだ。この結果、石室に通じる通路と石室だけを残して、石室を取り巻くように擁壁が建設された。そのため、墳丘の旧状を知る術はほとんど失われてしまった。

石室は、明治と1935年の少なくとも2回の調査が行われたようである。しかし、出土遺物は現存しておらず、図面も残されていなかった。そうした状況の中、2004年に我々は墳丘測量調査と石室の実測調査を行ったのであった。

（清家）

調査の契機 高知大学考古学研究室では、2004年より一貫して高知の後期・終末期古墳をテーマに調査を行ってきた。我々が継続して行ってきた調査の中で、朝倉古墳は初めて測量調査を手がけた古墳である。また、研究室代表の清家は、2006年度より科学研究費「弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究」の交付を受け、後期古墳の墳丘・石室・副葬品などから南四国を中心とした交流について調査と研究を進めているところであった。朝倉古墳はその石室形態から他地域との強い関連が考えられるだけでなく、古墳時代後期から終末期における土佐の首長勢力の動態を考える上で欠くことのできない古墳であることが、研究が進展する中で明らかとなってきた。しかも、上述のように朝倉古墳から出土した遺



図4 石室掘削前状況



図5 遺物出土状況

物は遺存しておらず、その時期も確定できていない。わずかに筆者が、石室形態からTK217型式期に石室は位置づけられるのではないかと想定したにとどまっていた（清家2007）。その想定も石室床面が発掘前の地表からさほど深くないところにあるという推測に基づくものであった。

つまり、本古墳は、科学技術の研究テーマである地域間交流に欠くことのできない資料でありながら、不明な点が非常に多かったのである。以上のことから、今回の調査を行うことにしたのである。（清家）

調査の経過 本古墳は2年で調査を行う計画を立てた。1年目は石室の玄室と墳丘の調査を行い、2年目は墳丘の補助的調査と羨道部・前部の調査を行う予定である。

1年目の今年度は、規模と墳形を確認するため墳丘第1トレンチを石室北東部に設置した。前述の通り、住宅開発のため石室は擁壁に取り囲まれているので、墳丘を調査する場所がここにしか残されていない。また、調査区設定場所は、前回の測量調査の折に「コンターラインが内側に入る箇所」として、墳丘端が存する可能性を指摘した箇所でもある（高知大学編2005）。石室は玄室部を調査した。

2008年8月2日から調査を開始した。例年以上の酷暑のため調査員の消耗は激しかったが、学生は弛むことなく作業を続けた。終盤にはやや天候に災いされたものの、調査は順調に進んだ。後述のように玄室は搅乱と盗掘が甚だしかったが、床面を検出することができた。玄室部分は8月19日に掘削が終了し、8月20日に写真撮影を行った。以後は、実測作業に移った。墳丘第1トレンチは、予想以上に造成土が堆積していたため掘り下げに時間を要し、8月28日によく写真撮影を行うことができた。8月31日には実測作業もすべて終わり、同日から埋め戻しを開始した。墳丘第1トレンチ・玄室ともに土嚢を使って埋め戻し、表面だけ土を被せている。9月1日にすべての作業を終了し、大学へ機材等を撤収している。（清家）

謝辞 調査を遂行するにあたり、遺跡周辺の皆様・研究者の皆様・関係諸機関には多大なご協力をいただきました。ご芳名を記して心よりお礼を申し上げます。

廣田佳久・福永伸哉・出原恵三・浜田恵子・松田直則・森田尚宏・安岡保・青木ハウス・朝



図6 発掘調査風景



図7 調査の1コマ

6 調査の経緯と経過

倉神社・朝倉宮の前奥畠内町内会・株式会社トヨタ部品四国共販高知支店・高知県教育委員会・
高知市教育委員会（個人・団体の順。五十音順。）
(清家)

参考文献

- 清家 章 2007 「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真陽
社、京都：pp. 447-464
- 高知大学考古学研究室編 2005 『朝倉古墳調査報告書』高知大学人文学部考古学研究室、高知
- 安岡源一 1953 「史跡朝倉古墳」『文化財調査報告書』第5集 高知県教育委員会、高知：pp. 13-16

第Ⅱ章 調査成果

1 墳丘の調査成果

玄室の北東約8mの位置に墳丘第1トレンチを設定した。約3.5×2mの南北に長いトレンチである。前述の通り現在は住宅開発のため墳丘のほとんどが失われているが、この場所の等高線は直線的でありかつ、やや西側へ入り込んでいる状況が認められた。この等高線の状況が墳形を反映している可能性が考えられたので、この地点にトレンチを設定した(図8)。

掘削の結果、造成土が厚く堆積していることが確認された。造成土はトレンチ南西端で約1.3m、北西端で約0.9mの堆積をしている。この堆積状況はトレンチ東側では異なり、南東・北東両端の堆積はおよそ0.6mの堆積が認められた。造成土直下からは、しまりの良い黄褐色の層が検出され、トレンチ北端に設けたサブトレンチでこの層を10cmほど掘り下げた結果、この層を地山と判断した(図9)。

地山面は北西から南東方向に向かって緩やかに下っている。古墳を築造する場合、石室のある場所が墳丘の中で最も高所であり、墳壠へ下っていくという旧地形が一般的である。そうした原則に沿えば、石室のある南側の地山が高くなるはずであるが、先ほども述べたように地山

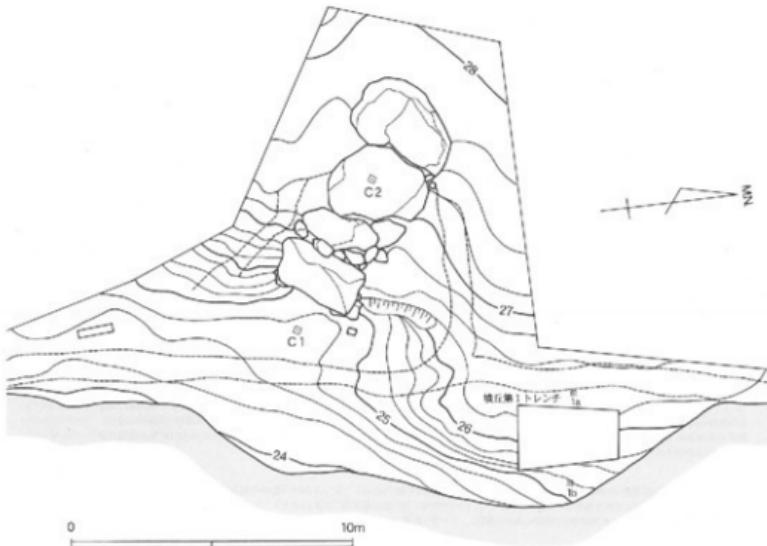
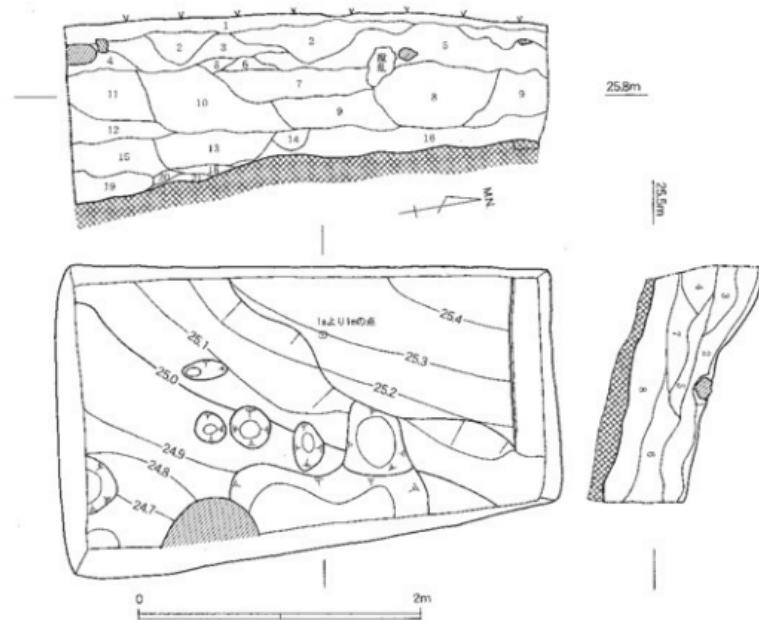


図8 調査区配図

は逆の様相を示している。このことは、本調査区の地山が削平を受けている可能性を示すものである。ただ、石室内の8A区断ち割りで検出した地山面の標高は24.2mと本調査区で得られた地山面の標高より40cm低いことは注意すべき点である。このことから、もともと石室部分の地山の標高は当調査区の地山より低かった可能性が高い。窪地に石室を設けた後、盛土を行って石室のある部分の墳丘を高く形成した可能性が考えられる。いずれにせよ、盛土が確認されなかったことや、造成土直下から地山が検出されたことなどから、地山面は改変を受けているものと考えられる。検出された地山の形状あるいは現在の地形から古墳築造当時の様相を推定



西壁土色

1. 7.5YR3/4緑褐色粘粒砂(中層20%含む) 2. 7.5YR3/4暗褐色粘粒砂(シルト質5%含む) 3. 7.5YR3/3緑褐色粘粒砂(中層15%含む) 4. 5YR4/6赤褐色粘粒砂(シルト質7%含む) 5. 7.5YR4/3黒褐色粘粒砂(泥炭20%含む) 6. 2.5Y4/4オリーブ褐色粘粒砂(中層7%含む) 7. 7.5YR4/4褐色粘粒砂(炭化物質3%、泥炭10%含む) 8. 7.5YR4/6褐色粘粒砂(中層20%含む) 9. 7.5YR4/4褐色粘粒砂(炭化10%含む) 10. 7.5YR4/4褐色粘粒砂(中層5%含む) 11. 7.5YR4/6褐色粘粒砂(シルト質2%含む) 12. 7.5YR4/6褐色粘粒砂(シルト質20%含む) 13. 7.5YR5/6褐色粘粒砂(炭化物質35%含む) 14. 7.5YR5/6褐色粘粒砂(炭化物質13%含む) 15. 7.5YR6/4赤褐色粘粒砂(シルト質15%含む) 16. 7.5YR6/6褐色粘粒砂(泥炭10%含む) 17. 7.5YR6/6褐色粘粒砂(泥炭3%含む) 18. 7.5YR6/6褐色粘粒砂(泥炭3%含む) 19. 7.5YR3/2褐色シルト 20. 7.5YR3/3褐色粘粒砂(シルト質7%含む) 21. 2.5YR6/6明黄色粘粒砂(泥炭5%含む) 1~21:造底上

北壁土色

1. 7.5YR3/4緑褐色粘粒砂(中層20%含む) 2. 7.5YR4/4褐色粘粒砂(中層7%含む) 3. 7.5YR4/1褐色粘粒砂～褐色砂 4. 7.5YR4/4褐色粘粒砂(中層15%含む) 5. 7.5YR4/3褐色粘粒砂(中層5%含む) 6. 7.5YR5/4に近い褐色粘粒砂(中層3%含む) 7. 7.5YR2/4に近い褐色粘粒砂(中層3%含む) 8. 7.5YR4/6赤褐色シルト～褐色粘粒砂(中層5%、泥炭2%含む) 1~8:造底上

図9 墳丘第1トレーン平面図・土層断面図

することは困難だと考えられる。

造成土中からは、近世以降の陶磁器片が多数出土しているほか、須恵器の壺の破片が出土している⁽¹⁾。(矢部)

2 石室調査区の成果

(1) 調査区の設定

今回調査を行うにあたり、2004年度の墳丘測量及び石室実測調査の基準点であったC1とC2を改めて設定した。この2点を石室調査区の基準点として調査区の設定をした。C1とC2間の距離は6mである。C1より西側を1mごとに1区から10区まで分けた上で、それぞれの地区を主軸ラインの南北でさらに2分し、主軸ラインより南側をA区、北側をB区と呼称した(図10)。例えば、調査区の南西隅の地区は10A区となる。本年度は石室玄室部を調査範囲とし、羨道部は次年度に調査する予定である。すなわち、本年度の調査対象地区は5区から10区であり、調査区の長さは約5.2m、幅は約2.5mである。(馬場)

(2) 調査の成果

堆積土層と床面の検出 2004年の測量調査では、側壁・奥壁下部の石材の観察から、床面は現地表直下あるいはごく浅いところにある可能性が高いと想定された(高知大学編2005)。しかし、想定以上に土壌が堆積していた。

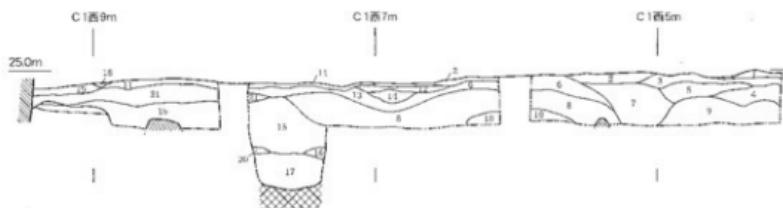
玄室は何度も人の手が入っていたようで、床面まで現代の遺物が混じる土が堆積していた。それと対応するように、土層断面には何度も掘削を受けた跡が認められる(図11)。現代の遺物が混じる土を除去すると、奥壁の付近から石列が検出された(図版5-(1))。これを掘り広げていくと主に壁面の際で同様の石が検出され、石のないところでは明黄褐色の盛土が確認された。盛土上に石列が認められない部分もあるが、床面上および盃掘坑内の堆積土壌に人頭大の石が含まれており、本来は石室床面全体に石が敷かれていたと考えられる。

この敷石あるいは明黄褐色の盛土を目指して玄室全体を掘り下げていった。床面の敷石は、奥壁付近の9A・10A区で多く確認された(図12)。9B・10B区は敷石の残りが良くなく、明黄褐色の盛土面が確認されたところが多い。8区から玄門付近の5区にかけては、玄室中央部に大規模な盃掘坑が穿たれているため、敷石あるいは



図10 石室調査区・区割り設定図

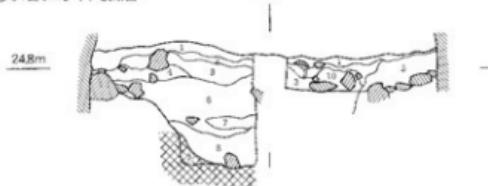
①石室主軸断面図



石室主軸断面図

1. 7.5YR3/4(褐色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/2)斑状色シルト層(5%含む) 2. 2.5YR5/2(褐色粒砂(2.5Y6/8)灰白色シルト層(5%含む)) 3. 7.5Y5/1(灰白色シルト)～縫隙粒砂(1.0YR7/1(灰白色シルト層(5%含む))) 4. 7.5YR4/3(褐色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(5%含む) 5. 1.0YR4/4(褐色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/2)斑状色シルト層(5%含む) 6. 7.5YR6/4(褐色色縫隙粒砂(2.5Y7/3)灰白色シルト層(10%含む)、7.5YR6/6(褐色シルト層(10%含む)、5%含む)) 7. 1.0YR4/6(褐色色縫隙粒砂(1.0YR7/6)褐色色シルト層(3%含む)) 8. 7.5YR4/4(褐色色縫隙粒砂(2.5Y7/2)斑状色シルト層(10%含む)、1.0YR4/2(褐色色シルト層(2%含む))) 9. 1.0YR4/6(褐色色縫隙粒砂(2.5Y7/6)褐色色シルト層(3%含む)、石を多く含む) 10. 7.5YR4/4(褐色色シルト)～縫隙粒砂(1.0YR7/7)斑状色シルト層(10%含む) 11. 1.0YR5/5(褐色色シルト)～縫隙粒砂(1.0YR5/4)斑状色シルト層(5%含む) 12. 7.5YR4/4(褐色色シルト)～縫隙粒砂(1.0YR5/3)斑状色シルト層(5%含む) 13. 7.5YR5/1(褐色色シルト)～縫隙粒砂(1.0YR5/2)斑状色シルト層(5%含む) 14. 7.5Y4/1(褐色色シルト)～縫隙粒砂(1.0YR5/8)斑状色シルト層(3%含む) 7.5Y6/1(褐色色シルト) 15. 1.0YR4/3(褐色色縫隙粒砂(2.5Y7/3)灰白色シルト層(3%含む)、2.0YR/3(褐色色シルト層(5%含む))) 16. 1.0YR4/3(褐色色縫隙粒砂(2.5Y7/3)灰白色シルト層(5%含む)、7.5YR6/4(褐色色シルト層(5%含む))) 17. 1.0YR4/4(褐色色縫隙粒砂(2.5Y7/2)灰白色シルト層(5%含む)、7.5YR6/4(褐色色シルト層(5%含む))) 18. 1.0YR4/2(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(20%含む) 19. 1.0YR4/3(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(10%含む) 20. 1.0YR4/4(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(10%含む)

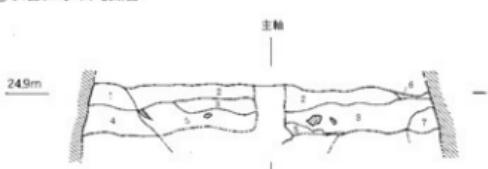
②C1西8mライン横断図



C1西8mライン横断面図

1. 1.0YR4/4(褐色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/7)斑状色シルト層(10%含む) 2. 7.5YR5/2(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/6)斑状色シルト層(5%含む) 3. 1.0YR3/3(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/5)斑状色シルト層(10%含む) 4. 1.0YR6/6(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/6)斑状色シルト層(5%含む) 5. 7.5YR6/6(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/6)斑状色シルト層(10%含む) 6. 7.5YR6/6(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/7)斑状色シルト層(5%含む) 7. 1.0YR4/3(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(5%含む) 8. 1.0YR3/4(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(5%含む) 9. 2.5Y4/3(オーリーブ色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(5%含む) 10. 2.5Y4/4(オーリーブ色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(5%含む)

③C1西6mライン横断図



C1西6mライン横断面図

1. 2.5YR3/3(褐色色シルト)～縫隙粒砂(灰を含む) 2. 1.0YR4/4(褐色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/2)斑状色シルト層(10%含む) 7.5YR6/6(褐色色シルト層(5%含む)) 3. 1.0YR3/2(褐色色縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(10%含む)、1.0YR4/2(褐色色シルト層(5%含む))) 4. 1.0YR6/6(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/6)斑状色シルト層(5%含む) 5. 7.5YR3/3(褐色色縫隙粒砂(2.5Y7/6)斑状色シルト層(10%含む)) 6. 1.0YR4/4(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(5%含む) 7. 5.5YR4/6(褐色色シルト)～縫隙粒砂(2.5Y7/3)斑状色シルト層(5%含む)

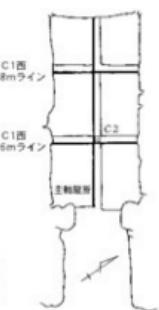


図11 石室調査区縦断・横断土層図

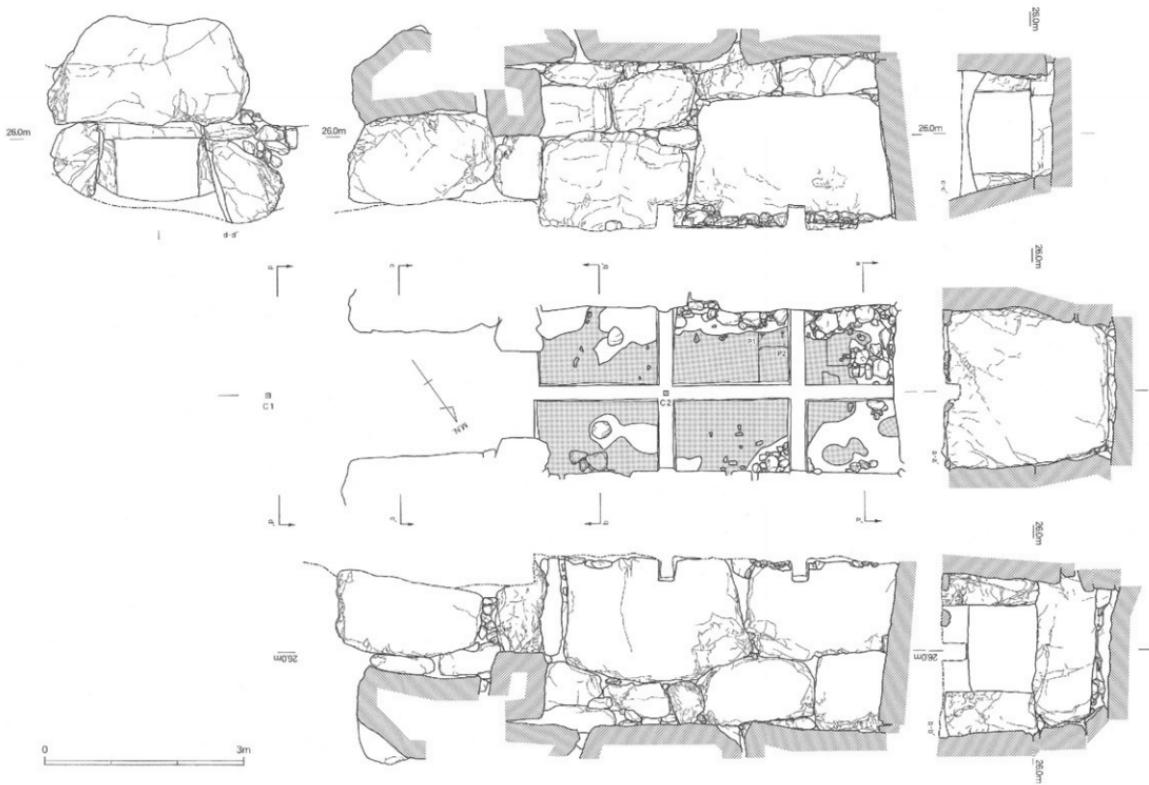


図12 石室調査区実測図 (国家7号岩井鉱業)



図13 上部の敷石に挟まれた土師器（9 A区）



図14 床面敷石検出状況（8 B区）

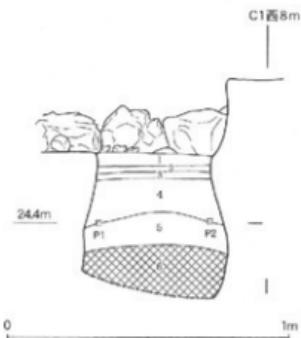
明黄褐色の盛土が検出された部分は少ない。わずかに8区（図14）と7A区で側壁の際を中心

に敷石と盛土が、7B区と5区・6区では、一部で盛土が確認されたのみである。（渡邊可）
敷石の観察 敷石がよく残っている9A・10A区の床面を観察すると、まず右側石に沿って一辺30~40cm程度の平石が列状に並んでいる（図12・図版5-（1））。これらの石の下および石室の隅には10~20cm程度の比較的小型の石が散かれ、10cm程度の高低差が見られる。このことから、床面は2面あった可能性が高い。また、上層の床面と思われる平石と下層と思われる石に挟まれた状態で、土師器片1点が出土している（図13）。この土師器片が、上層の平石が敷かれる前に置かれていたものであるとすると、やはり床面は2面ある可能性が高い。

9A・10A区における上層の平石のレベルは約24.760m、下層の小型の石群のレベルは約24.635mである。また、敷石が認められず盛土面が検出された部分のレベルは約24.638mである。したがって奥壁付近の9A・10A区における玄室高は、上層の床面から測ると2.40m、下層の床面から測ると2.51mとなる。石室中央付近では明確に敷石が2段になっている様子は現状では確認できていないが、7A・8A区で検出された敷石上から玄室高を測ると2.36mとなる。玄門付近では原位置を保っていると思われる敷石はほとんどないが、検出された盛土面から測ると5A・6A区で2.50mとなる。同様に、玄門高は1.44mとなる。（渡邊可）

盗掘坑および床面下の土層状況の観察 盗掘坑は全掘せず、8A区の西側壁の際にサブトレンチを設定した。床面より約50cmのところで盗掘坑の底面を確認している。

この盗掘坑の掘り方を観察すると、地山の上に約



1. 10YR6/4明黄褐色シルト～概塑性粘土 (2.5Y7/4 深黄色シルト 3% 黄褐色含む)
 2. 10T8/3 細褐色塊状粘土 (7.5Y4/1 深黄色シルト 2% 黄褐色含む)
 3. N4/6R褐色シルト (2.5G7E/1 オーバー灰褐色シルト後 1% 含む)
 4. 2.5Y4/4明黄褐色細粒砂 (2.5Y8/4 深黄色シルト 1% 含む)
 5. 10YR7/8 黄褐色シルト～概塑性粘土 (2.5Y7/3 深黄色シルト 1% 含む)
 6. 2.5Y4/2深黄色シルト (2.5Y8/3 深黄色シルト 2% 含む)
- （基底底付）

図15 8 A区断ち割り南側上層図

14 石室調査区の成果

10cmの盛土層を2層重ね(図15-4・5層)、さらに2~3cmほどの薄い層を2層重ね(図15-2・3層)、最上層には明黄褐色の精良な土を使用している(図15-1層)。その上に敷石を置いて床面が構成されていることが明らかになった。

(渡邊司)

遺物の出土状況 床面上および堆積土層からは、古墳時代から現代までの遺物が混在して出土している。堆積土中に人頭大の石が含まれていたことからも、土層の状態は自然に堆積したものではなく、盜掘の際の埋め戻しといった人為的な所為によるものであると見られる。よって原位置をとどめていた遺物はほとんどない。唯一9A・10A区から出土した短頸壺(図16-7)は、敷石の間に挟まれる位置から出土したので、原位置に近い状態であったと考えられる。

古墳時代の遺物には短頸壺のほか、須恵器の杯蓋・高杯・甕、鉄片などがある。短頸壺を除いて小破片での出土であり、完形のものはない。古代以降の遺物は、中世の瓦器碗・土師質土器、近世の陶磁器や寛永通宝などが出土している。

なお、次年度も引き続き調査を行うため、今年度の調査では盜掘坑は全掘せず、土層観察用の畦も残したまま埋め戻した。

(渡邊司)

注

- (1) 出土した須恵質の甕は小破片であるため報告書に掲載していないが、断面が灰赤色を呈し、器壁は0.9cmを測る。表面には斜格子状のたたき目、裏面には同心円状の当て具痕をもつ。古墳時代の遺物と考えられる。

参考文献

高知大学考古学研究室編 2005『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学人文学部考古学研究室、高知

第III章 出土遺物

1 出土遺物の種類

出土遺物は石室調査区と墳丘調査区から出土しているが、図示し得たものは石室出土の遺物だけである。遺物は、須恵器・土師器・鉄片など古墳の埋葬に伴うもの以外に、中近世の土器・陶磁器と貨幣も出土している。鉄片と貨幣は現在保存処理中であるので、今回の報告からはずして割愛した。

(清家)

2 古墳時代の土器

古墳時代に属する遺物は須恵器と土師器の2種類である。須恵器では蓋杯・高杯・短頸壺・甕が出土している。土師器では高杯の脚部と思われる破片が出土している。図示したものはすべて石室内から出土したものである。

蓋杯 (図16-1～6) 1は復元口径11.1cm、残存高2.9cmである。天井部は大部分が欠損しているが、口縁部に向かってなだらかにカーブする。天井部から口縁部の境界付近でカーブがやや強くなっている。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。口縁端部付近の内面にはかえりがついているが、かえりの先端は口縁端部よりも下方へ突出する。胎土は緻密である。欠損部分が多く調整や器高は不明である。

2は復元口径9.6cm、残存高0.9cmである。天井部は大部分が欠損し口縁部のみ出土している。口縁部に向かってなだらかにカーブする。口縁端部は丸くおさめる。口縁端部付近の内面にはかえりがついているが、かえりの先端は口縁端部よりも下方へ突出する。胎土は緻密である。小破片のため調

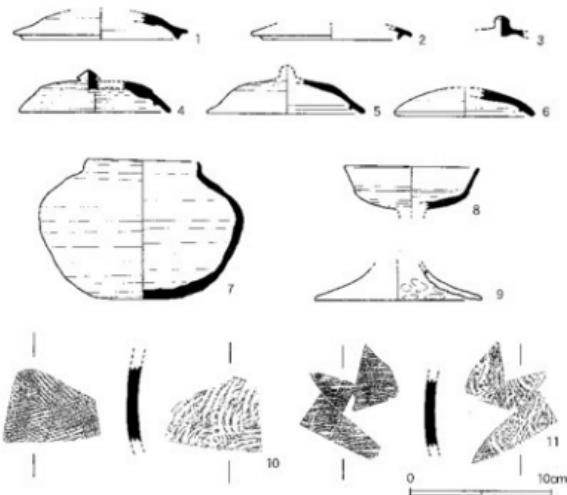


図16 古墳時代の土器

整や器高は不明である。

3は乳頭様のツマミである。直径1.1cm、高さ0.8cmである。胎土は緻密である。胎土および焼成が5とよく似ており、同一個体の可能性がある。

4は復元口径10.8cm、残存高3.0cmである。天井頂部まで遺存し、頂部に直径1.6cm、高さ0.8cmの宝珠ツマミを持つ。天井部は平坦であり、天井部から口縁部へはなだらかにカーブする。口縁端部は丸くおさめる。口縁部の内面にはかえりがついているが、かえりの先端は口縁端部よりも下方には突出しない。胎土は緻密である。天井部側から3分の1の範囲にはケズリが、ケズリより下側の範囲にはナデによる調整がみられる。ロクロの回転は右回りである。

5は復元口径11.4cm、残存高3.4cmである。天井部はやや平坦であり、天井部から口縁部へはなだらかにカーブするが、体部中央でカーブがやや強くなっている。口縁端部は丸くおさめる。口縁端部付近の内面にはかえりがついているが、かえりの先端が口縁端部よりも下方には突出しない。胎土は緻密である。天井部にはケズリが、ケズリより下側の範囲にはナデによる調整がみられる。またロクロの回転方向は右回りである。

6は復元口径10.0cm、残存高1.9cmである。天井部から口縁部へはなだらかにカーブする。口縁端部は丸くおさめる。口縁部の内面にはかえりがついているが、かえりの端部が口縁端部よりも下方には突出しない。胎土は荒い砂粒が混じるが比較的緻密である。調整にはナデとケズリが使われている。欠損部分が多く器高は不明である。 (鳴)

短頸壺 (図16-7) 口径7.8cm、器高9.9cmである。残りが非常によく、口縁と体部の一部を欠くのみである。わずかに内湾する口縁をもつ。口縁端部は丸くおさめる。体部は肩の張りがややきつくなっているが、体部中央付近で垂直に立ち、そこから底部にかけてなだらかにカーブしていく。底部は直径6.4cmとかなり広い。胎土は荒い砂粒が混じっており、やや粗雑である。底部から5分の1の範囲にケズリ、残りの5分の4の範囲にはナデによる調整がみられる。またロクロの回転方向は右回りである。 (鳴)

高杯 (図16-8) 杯部のみで脚部は欠損する。杯部の復元口径は9.6cm、残存高3.0cmである。杯部の中央付近には稜線がめぐる。口縁端部は丸くおさめる。胎土は緻密である。調整にはナデとケズリが使われており、またロクロの使用も認められ、素地土に含まれる砂粒の動きから右回りに回転していることが確認できる。 (鳴)

土師器 (図16-9) おそらく高杯の脚部と思われる。脚部のみで杯部は欠損する。復元底径11.9cm、残存高2.2cmである。脚部の裾部はラッパ状に広がり、端部は丸くおさめる。調整にはナデが使われており、底部には指頭圧痕が確認できる。また底部内面には布目痕を確認できる (図版7-(1))。布目は1cmあたり経糸10本、緯糸10本走っている。胎土は緻密であるが全体的にもろい。欠損部が多く器高は不明である。 (鳴)

甕 (図16-10・11) 10は厚さ0.8cmである。甕の内外面にはタタキ目がみられ、内面には同心

円状のタタキ目が、外面には平行のタタキ目が施されている。欠損部分が多く調整や器高は不明である。

11は厚さ0.7cmである。甕の内面にはタタキ目がみられる。内面には同心円状のタタキ目が施されている。欠損部分が多く調整や器高は不明である。

須恵器の時期に関しては、宝珠ツマミおよび乳頭様のツマミを持ち、蓋内面にかえりを有する、いわゆる杯Gの蓋がみられる。一方、杯Hは出土していない。古墳の規模から考えて土器の出土量が少ないので、数多くの土器が持ち出されていることは明らかであり、今回の土器のみから決定的な事は述べにくいがTK217型式段階（田辺1966）のものであると思われる。しかしTK217型式段階には時間幅があるので、今後さらに詳細に検討していく必要がある。（端）

3 中近世の土器

瓦器（図17-1～3） 1は瓦器の碗である。復元口径は15.8cmである。立ち上がりはなだらかなカーブを描いている。口縁端部は丸くおさめられており、沈線が施されていることから、楠葉型の可能性が高い。外面は指頭圧痕で調整されており、凹凸がある。ヘラミガキも施されており、ヘラミガキの隙間は大きい。また、内面は平行線上に暗文が密に施されていることからII-2期であると考えられる（尾上ほか1995）^⑩。

2は瓦器の瓶である。外面はナデで調整されている。器壁が厚く、内面に水平な暗文が認められる。

楠葉型もしくは和泉型だと考えられる。高台はしっかりとしており、II-2期と考えられる（尾上ほか1995）。

3は瓦器の皿である。復元口径は14.2cmである。立ち上がりは緩やかであり、口縁端部は丸くおさめる。内面上部にはナデで調整されており、内部には暗文が認められない。外面上部はナデで調整されており、外面下部には指頭圧頭が見られる。和泉型と考えられる。また器高が低いことからIII-3期であると考えられる（尾上ほか

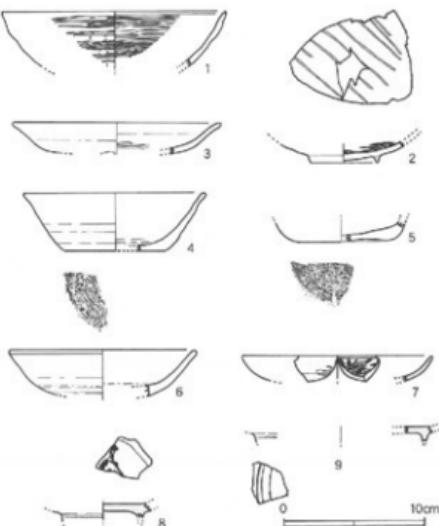


図17 中近世の土器

1995)。

(藤井)

土師質土器 (図17-4・5) 4と5は土師質土器である。4は杯であり、色調はにぶい黄橙色を呈し、底径3.8cm、高さ4.1cmである。体部は直立して立ち上がり、口縁部はやや外反して端部を丸くおさめる。内外面ともにナデ調整を施している。5は皿で、色調はにぶい橙色を呈し、底径6.9cmである。内外面ともにナデ調整である。底部内面には凹みがあり、糸切り痕が認められる。時期はどちらも14世紀のものと思われる。

(馬場)

陶磁器 (図17-6~9) 次に、近世の遺物について述べる。6は陶器の皿であり、色調は明赤褐色の地に黒褐色の釉を施しており、口径は13.0cmである。体部は直立して立ち上がり、端部は丸くおさめる。19世紀初頭を中心とする時期に位置づけることができる。

7・8・9は染付磁器である。7は皿であり、口径13.4cmである。皿内面には草花文が、外面には連続唐草文があり、色調は白色を呈している。8は碗ではないかと思われる。高台部分しか残存しておらず、法量は不明である。高台の外側には2本の線がある。9は皿である。9も高台部分しか残存していないので法量は不明であるが、高台の内と外にはそれぞれ1本ずつ圓線が描かれている。

(馬場)

注

(1) 古代から近世の土器については、松田直則氏・浜田恵子氏よりご教示を得た。

参考文献

尾上火・森島康雄・近江俊秀 1995 「瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真編社、京都：pp. 315~337

田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群』I 平安学園創立九十周年記念研究論集第10号 平安学園教育研究会、京都

第IV章 まとめ

2004年に測量調査を行って以来、4年ぶりに朝倉古墳の調査を実施した。調査は2年にわたつて行う計画を立て、今回の調査は1年目の調査にあたる。今までにも調査の手が入っているが、図面や出土遺物が今日に伝わっておらず、実質的に初めての発掘調査である。

今年度は、墳丘に1ヵ所のトレーニングを入れ、石室は玄室部分を調査した。以下で墳丘・石室の調査成果と課題をまとめて、今回の調査の総括としたい。

墳丘の調査 当古墳は、墳丘調査が行われないまま墳丘の大部分が破壊され、石室とその周辺が擁壁に囲まれた状態にある。したがって、調査区を設定できる地点は、石室開口部北側の墳丘第1トレーニングの場所に限られていた。残念ながら墳丘の破壊の程度はすさまじく、墳丘第1トレーニングにおいて墳丘規模と墳形を想定できる材料を得ることはできなかった。墳丘第1トレーニングでは、最も深いところで現地表下約1mまで造成土が堆積しており、その直下から地山が検出された。

測量調査時において、石室開口部北側にある等高線が直線的に走ることから、当古墳が方墳である可能性を示唆していた（高知大学編2005）が、この場所の等高線は造成の結果であり、墳形を考える材料とはなり得ないことが明らかとなった。

石室の調査 今年度は玄室部分を調査した。玄室奥壁沿い、あるいは右側壁沿いに石室床面の敷石を検出することができた。ただ、床面の8割以上は盗掘あるいは乱掘の手が及び、玄室床面中央部は敷石が残っていないかった。玄室北西部で検出された敷石は2段に重なっており、1段目と2段目の石の間に土師器が挟まっていたことから、追葬時に床面の敷石を置き直した可能性が高い。すなわち床面は2枚あった可能性がある。盜掘坑の一部を掘削した結果、敷石は地山の上ではなく、地山の上に何層か盛土を積んで敷石を置く面を形成していることが明らかとなっている。

敷石の検出により玄室の高さが判明した。奥壁側の高さは、下層の床面から測ると2.51m、上層からだと2.40mを測り、玄門側の高さも2.50mとなり、玄門高は1.44mとなる。その他は測量報告時（高知大学編2005）と変わらないが、再度その数字を示しておくと、全長8.33m、玄室長5.23m、玄室幅2.54m（奥壁付近）・2.40m（玄門付近）、羨道長さ3.10m、羨道幅1.85m、玄門幅1.30mである。

朝倉古墳は山崎信二のいう角塚型（山崎1985）の一種である。角塚型は玄室高と玄室幅の比によって時期差を顕著に示す（清家2007）が、玄室のサイズが確定したことにより、朝倉古墳に類する古墳の位置づけが微妙に変わってくる。

前稿（清家2007）で筆者は角塚型を3段階に分け、朝倉古墳を第2段階においた。朝倉古墳

自体の位置づけには変更はない。むしろ、第2段階に属するとした他の古墳の位置を変更する必要が出てきた。前稿（清家2007）では、朝倉古墳と同じ第2段階として愛媛県宇摩向山1号墳1号石室と香川県角塚古墳を挙げていた。その際、向山1号墳と朝倉古墳に比べ角塚古墳の玄室高が低いことから、角塚古墳を第3段階に下げるべきかもしれないという見解を付しておいた。今回の調査により、朝倉古墳における玄室高の玄室幅に対する比率が、向山1号墳1号石室のそれと近似するところとなり、角塚古墳の玄室高だけが頭著に低くなつた。角塚古墳の石室を第3段階に下げる根拠がより強くなったのである。角塚古墳も今後調査が継続的に行われることであるので、そうした情報を得て再検討を行っていきたい。

出土遺物 量的には多くはないが、古墳に伴う土器や鉄器が出土したことでも大きな成果であった。これまでにも石室からは須恵器・鉄鏃・馬具などが出土したとされている。しかし、それらの遺物はいずれも現在に伝わっていない。今回出土した遺物が、朝倉古墳に伴う確実な資料ということになる。出土した須恵器のうち、杯はいわゆる杯Gのみが出土した。出土した土器の量が少ないので、既掘によって多くの土器が石室の外へ持ち出された可能性を考慮しつつも、古墳の築造年代を考える上で一定の傾向を示していると言えよう。ここでは7世紀前葉と考えておきたい。

今後の課題 残念ながら墳丘規模と墳形に関する情報はほとんど得ることはできなかつた。ただ、墳丘第1トレーナーで検出した地山面は石室床面よりやや高い。擁壁工事の時にこの部分が削平されているとすれば、本来の地山はさらに高かった可能性が高い。北側の墳丘裾部が石室床面にあわせて作られていたとするならば、墳丘は墳丘第1トレーナーのさらに北側に及んでいた可能性もある。しかし、そのことを検証するためには、住宅の擁壁と土地境界となつてゐる斜面地に挟まれている幅約1mの通路部分を調査する他はない。掘削できる範囲が狭いので調査は困難が予想されるが、調査が可能かどうかを含めて検討していきたい。

石室にかんしては、次年度は羨道から前庭部を解明したいと考えている。玄門における敷居石の存在など、羨道の構造を明らかにしたい。その過程で出土した土器から、古墳築造年代についてもさらに情報を得たいと考えている。

こうした古墳の詳細を解明していくことで、土佐における首長墳の動向や、律令体制成立にむけて土佐がどのような対応を行つたかなどを検討していきたい。 （この章すべて清家）

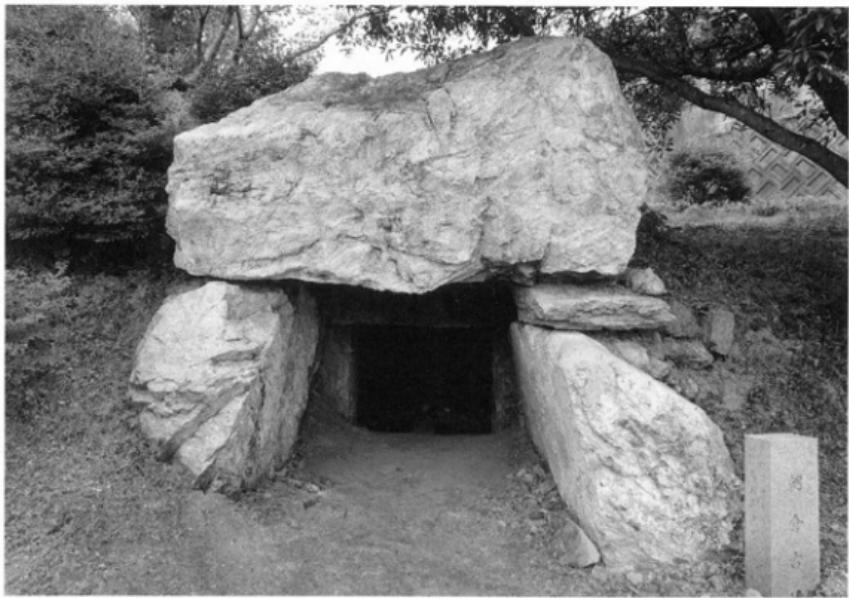
参考文献

- 高知大学考古学研究室編 2005『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学人文学部考古学研究室、高知
清家 章 2007『高知平野における大型後期古墳の動向』『考古学論究一小笠原好彦先生退任記念論集一』真樹
社、京都：pp. 447-464
- 山崎信二 1985『横穴式石室構造の地域別比較研究』文部省科学研究費報告書（山崎信二2003『古代瓦と横穴
式石室の研究』同成社、東京に再録。）

図 版



(1) 古墳の立地



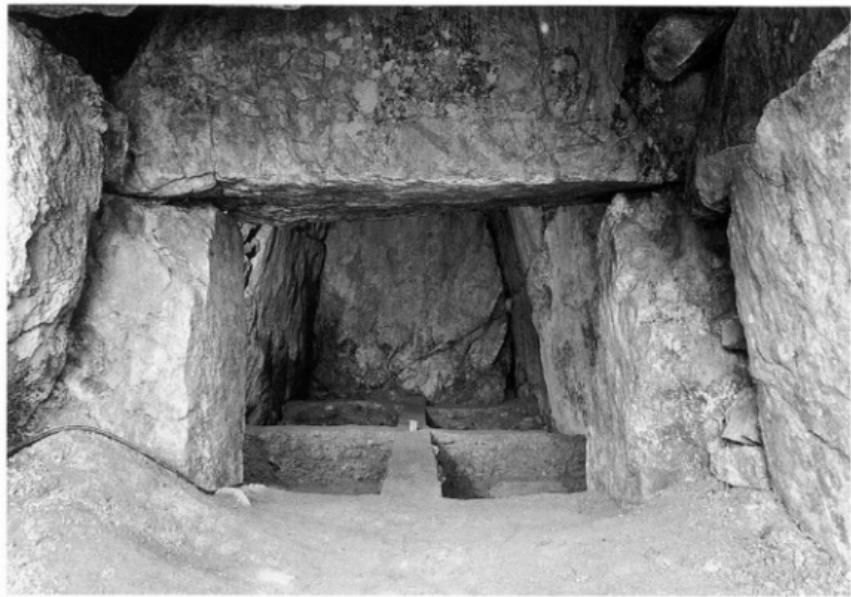
(2) 石室正面



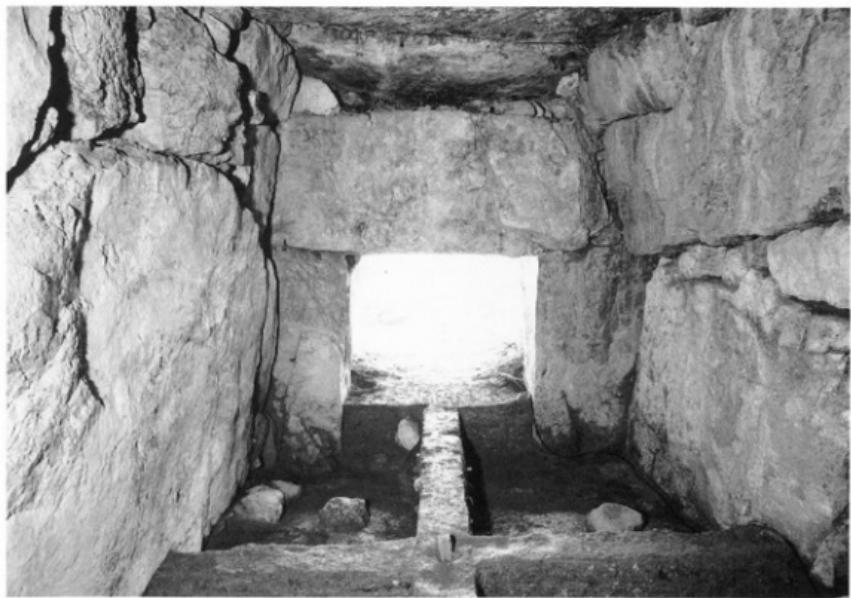
(1) 墳丘第1トレンチ（西から）



(2) 墳丘第1トレンチ（南から）



(1) 石室玄門（狭道から）



(2) 石室玄門（玄室から）



(1) 石室奥壁



(2) 石室調查区全景



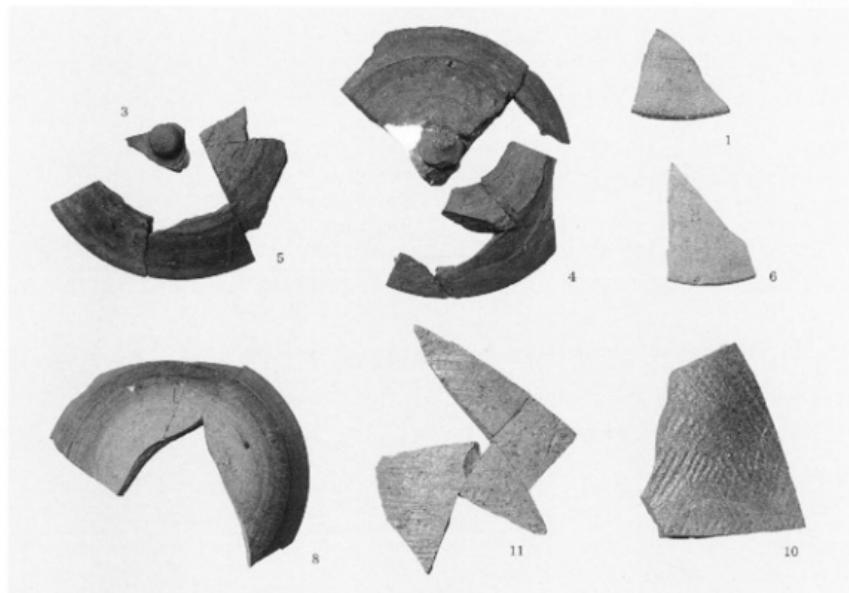
(1) 9 A・10A区敷石（北から）



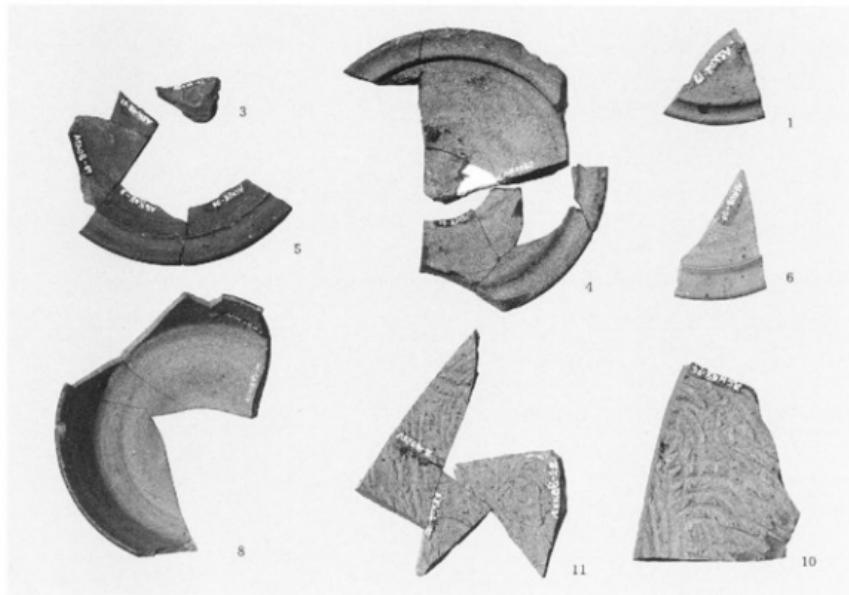
(2) 7 B・8 B区床面（東から）



(3) 8 A区床面と壺掘抗断ち割り（北から）



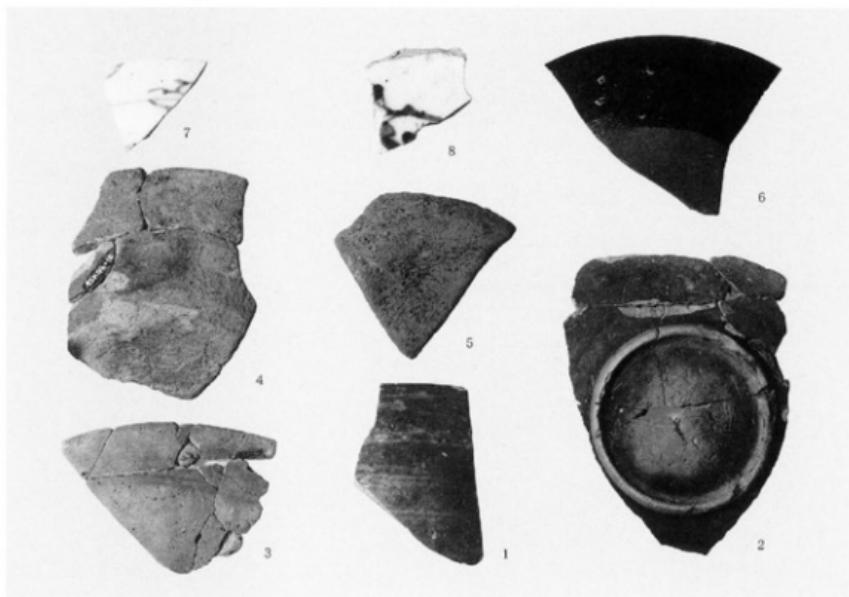
(1) 古墳時代の土器 1 (番号は挿図に対応)



(2) 古墳時代の土器 1 裏面 (番号は挿図に対応)



(1) 古墳時代の土器 2 (番号は挿図に対応)



(2) 中近世の土器 (番号は挿図に対応)

【報告書抄録】

ふりがな	あさぐらこふんはっくつちょうさがいようほうこくしょ			
書名	朝倉古墳発掘調査概要報告書			
両書名				
シリーズ名	高知大学考古学調査研究報告			
シリーズ番号	第6冊			
編著者名	高知大学人文学部考古学研究室（編者：渡邊可奈子）			
発行機関	高知大学人文学部考古学研究室			
所在地	高知市曙町2-5-1			
所収遺跡名	所在地			コード
朝倉古墳	高知市朝倉字宮の奥			市町村 遺跡番号 201
北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
33° 33' 03"	133° 28' 40"	080802~080901	20m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
朝倉古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	須恵器・瓦器・陶磁器
				特記事項

朝倉古墳発掘調査概要報告書

-高知大学考古学調査研究報告第6冊-

2009年3月発行

編集 高知大学人文学部考古学研究室
 発行 〒780-8520 高知市曙町2-5-1
 印刷 有限会社 西村謹写堂
